シリーズ掌編小説（2）

寂寞

松島武治

名古屋の南部工業地帯には、トヨタ、三菱といった大企業だけでなく、無数と言っていい中小の企業が住宅街と隣り合わせに立ち並んでいる。

土田次郎（つちだじろう）はその中のある自動車メーカーの孫下請をしている二十人ほどの町工場で中学を卒業以来、もう十年以上働いている。今では工場長とともに会社にとってなくてはならない存在であった。

彼の職場は大した技術を必要としない自動旋盤（単能機）を使う単純作業が主だったが、彼はもちまえの器用さで社長や同僚たちから喜ばれていた。まず、単能機の故障はだいたい次郎が直してしまう。今ではもう使わなくなったベルト駆動式の古い旋盤を「自動螺子切り盤」に改造して一気に生産力を上げた。寄せ集めの鉄クズから手動運搬式のリフトを作って、十キロ余の完成部品箱を腹に乗せて運ぶことからみんなを解放した。社長が、土田君は大企業へ出しても恥ずかしくないエンジニアだと従業員たちの前で自慢し、みんなもそれを拍手して聞くのだった。

従業員たちに何かと煙たがられる工場長は、従業員たちに何か無理を頼む時（残業要請など）、まず次郎に相談を持ちかけた。次郎を通すと、みんな「しょうがねえな」と納得する。カドが立たない。従業員たちの方でも、次郎を通して何らかの要求を出すことがあった。冬の寒さをなんとかしてほしいと頼むと、彼は工場全体を暖房できる安上がりのアイデアを出して実現さ

せた。また、世間が春闘の盛りに、左翼思想に「かぶれた」若い従業員が、「土田さん、ウチも日給をあげてもらいましょうよ」と次郎を煽ったりすると、次郎は困った顔をしながら、それでも社長に、こんなこといってるやつもいますなど、一応取り次いだりするのだ。さすがにそう簡単には日給は上がらなかったが。

そういう職場での微妙な立場を、次郎はほとんど無関心に黙々と勤めていた。彼は意外にも職場の誰ともあまり口をきかない。仕事が終わるとすぐに帰り、休日に誰かと一緒に遊んだりすることもなかった。会社も従業員も、無意識のうちに彼を一つの便利な「システム」として重宝していた。彼がいることで余計な軋轢が起きていないことは、近所の同じような会社で様々なトラブルが起きていることからも明らかだった。高度経済成長で中卒者が「月の石」などといわれていた時代はもうとっくに過ぎていたが、それでも中小の会社は業態に限らず若い従業員を多く獲得したいと思っていた。社長や工場長は、誰も会社をやめたりする気が起きないように腐心していた。次郎についてはいうまでもなかった。

ある日、次郎は社長から食事に誘われた。次郎はそれが会社の懐柔策だとか勘ぐることもなく、ある料理屋まで社長についていった。

大きな皿に少量だけ盛った名前もわからない料理を食べながら、次郎は社長の持ち出した見合いの話を関心なさそうに聞いていた。

「わしゃね、君には感服してるんだ。でまあ、今の若え人には老婆心になるが、何(なん)か君の世話ができたらと思ってねえ。わしの姪の友だちという子なんだが、一度会って気に入らなければわしからことわる。見込みがあったら、あとは若え者(わけもん)同士話し合えばいいが…」

「はあ」

「それとも、もう誰かおるんかね、いい人でも」

「いえ、別に」

次郎は二十八になる。これまで結婚については考えたことがない。出会いの場もないし、ことさら相手を探すこともしなかった。会社には九州から「カップル」で名古屋に上ってきて今の会社に入り、数年経って社長の媒酌で結婚し、会社敷地内に建てられた社宅で共働きしている者もいる。その社宅は二階建て四軒で三軒まで埋まっていた。社長は残りの一軒に次郎を入れたいと思っていた。そうすれば彼が万が一にも他所へ転職することもないだろうと考えていた。

次郎の両親はもう亡くなっていて、親の代からの借家に一人で暮らしていた。七つ歳上の兄がいるが、父が元気なときに大学まで出て銀行員になり、結婚して今は仕事の都合で横浜にいる。課長代理補佐とかいう役職についているという。次郎が中学生になったとき、両親が次々病気で倒れ、兄の妻という人が時々来名してはいたが、両親の世話はほぼ次郎が行なった。両親の三年にわたる入院で、父の築いたわずかな財産はすべて治療のために消えた。両親の葬儀など一切を取り仕切った兄は、経済的なことは心配ないから進学するようにと言ってくれたが、次郎の方から大学どころか高校への進学もしないと兄に言い切った。兄はそれをやせ我慢だといったが、次郎の気持ちは変わらなかった。今の会社も自転車で通えるところを自分で新聞広告で見つけた。借家での一人暮らしも、食事はツケのきく近所の食堂で済ませ、週末は自炊し、家賃も自分で大家さんに届けていた。一つには父より早く亡くなった母が幼少から彼を厳しく仕込んだということがある。兄が高校の受験勉強しているときに、母は小学生の次郎に台所で料理を教えていた。

彼の父は「頭のいい」兄を自慢にし、次郎は何かと兄と比較された。しかし母は、次郎に「自分の力で生きるのよ」という言葉をいつもいい聞かせ、勉強よりも生活力をつけようとしていた。父にかしずくだけの人生だったという母の無念の心情を、次郎はだんだん理解するようになった。次郎はこれらの家族の元でやや複雑な人生観を築いていった。

次郎は社長の勧めにどう応えていいか困った。
「ちょっと今すぐには返事が…」
「うん、そらそうだ。でも、会ってみてそれから考えてみるのもいいと思うがねえ。ほりゃ、馬には乗ってみい、人には添うてみいていうが」
その場ではっきりことわる理由が見つからなかった彼は、結局、その女(ひと)に会うことにした。次郎の頼みで、社長夫妻だけが同席して別の日に同じ料理屋で一緒に食事をするだけの形で見合いをした。そしてそのまましばらくその女と付き合うことになった。
人生で始めて若い女と付き合うことで、次郎が気づいたのは、女が次第にいろいろな魅力を自分に対して発揮してくることだった。女の手といえば、指先の曲がった母の荒れた手しか知らない彼は、若い女の手がこんなにすべすべしているのかと思った。美人ではなかったが、眼の白い部分が近くでよく見ると青みがかっていて、その無垢な感じを美しいと思った。時々髪の間からのぞく耳の白さ、そして唇のやわらかいこと。最後に、彼が結婚してくれといえば恐らくはいと答えるであろうこの女は、その返事によって彼と性の関係を持つことにも承諾を与えるのである。そう考えるとさすがの彼も体中に何か滾(たぎ)るような欲望を感じるのだった。
そんなとき、彼は唐突に或る母の姿を思い出すのだ。
小学五年の夏休みだった。夜更けまで漫画を読んでいて、同室の大学受験中の兄に叱られ、就寝の前にトイレに立った時、ふと両親の寝ている部屋に気配を感じて、いけないと思いながら襖越しに聞き耳を立ててしまった。彼は次第に自分の動悸と息が荒くなるのに気づかなかった。そのとき突然、襖が開いた。寝巻き姿の母が「じろさん、おしっこよね、さ、行きますよ」と、彼の手を引いて連れていった。彼が用を済ませて出てくると、母が「おやすみ、じろさん」と微かに笑っているように言った、その母の姿である。

――二カ月が過ぎた。

次郎たちの交際を機嫌よく見守っていた社長は、もうすっかり彼等が結婚するものとばかり思っていた。だから次郎から、また女の家の者から交際はやめになったと聞いた時にはひどく驚いた。次郎の方がことわりをいったと知ると、社長はいくらか感情的になったのを隠さず、

「一体、何がいかんかったかね？」

次郎は社長の不機嫌に困惑しながらも、珍しくはっきりと答えた。

「不満とかじゃないです。ただ、今はちょっと、女の人と暮らすことを考えると、気分的に疲れてしまうんです。それだけです」

次郎はふと、自分が初めて他人に自分の心を見せたような気がして赤面した。